論　文　の　和　文　要　旨

論文題目	台湾閩南語音韻研究－梧棲鎮閩南語を中心に
氏名	林　虹瑛

本論では、台湾中部の港町—梧棲鎮の閩南語を中心に、その音韻体系を記述及び分析した。台湾は多言語社会である。台湾で使用されている言語のうち、台湾閩南語は、共通語の華語を除いて話者数が最も多い言語である。閩南語話者が台湾に移民し始めた清朝以来、数百年を経て、台湾閩南語は混淆、変化を重ねてきている。交通の発達やマスメディアの発展によって、台湾各地における閩南語の地域差は少なくなってきている。本論文では梧棲鎮閩南語のインフォーマントの祖籍地である中国福建省泉州市安溪県駟嶺村の閩南語も、参考としてその音韻体系を記述、分析した。梧棲鎮閩南語及びインフォーマントの祖籍地にあたる駟嶺村閩南語の音韻体系は、結果としては、完全に一致しているものではない。その理由としては、言語の自然変化のほかに、政治的な要因による変化を挙げることができる。本論文各章の研究目的と方法及び成果は次のように要約することができる。

第１章は台湾閩南語に関する概論である。1.1 では台湾の言語状況についての紹介。1.1.1 では台湾の地理、1.1.2 では台湾の歴史、1.1.3 では社会人口構成から台湾の言語事情をみる。1.2 では台湾閩南語の位置づけについて述べる。1.2.1 では漢語と閩南語の関係を概略的に述べ、1.2.2 では台湾語という名称、及びその他の名称についての整理と紹介である。また、共通語としての華語について、その名称の変化を紹介する。1.3 では梧棲鎮の歴史、地理及び社会構成などを整理する。1.4 では調査方法、1.5 では梧棲鎮閩南語及び駟嶺村閩南語についての基本文型を述べる。1.6 では表記法に関するものである。

閩南語はほかの漢語方言と同じように、音節内で音の現れる位置は一定している。第２章では頭子音、母音と音節末子音の順に述べる。

2.1 では子音音素を紹介する。2.1.1 では頭子音を両唇音、歯茎音、軟口蓋音、声門音と鼻音の項目に分けて述べる。2.1.2 では音節末に現れる子音音素を述べ、その音環境を記述する。さらに音声学の先行研究を参照し、末子音を頭子音と同じように/b/、/l/、/g/で分析する試みをおこなった。

2.2 では母音音素及びその音声環境について記述している。母音には 2.2.1 の主核母音、2.2.2 の介音および 2.2.3 母音的韻尾に分けて述べる。

2.3 は母音と末子音の組み合わせについての記述である。梧棲鎮閩南語では開

音節は単母音(2.3.1.1)、二重母音(2.3.1.2)、最多三重母音(2.3.1.3)の組み合わせがある。2.3.2 では閉音節、2.3.3 では音節主音的鼻音、2.3.4 では梧棲鎮閩南語の韻母を記述している。

2.4 では梧棲鎮閩南語の音節構造を分析する。2.1 で検討した音韻体系を 2.4 で再検討する。声門閉鎖音は声調の弁別素性であり、末子音は/b/、/l/、/g/で分析することが適当であり、それによって梧棲鎮閩南語の音韻体系を明らかにする。

まず 2.4.1 では漢語の音節構造、2.4.2 では閩南語の音節構造、2.4.3 では梧棲鎮閩南語の音節の合併、同化、音増加と音脱落について記述及び分析する。2.5 では超分節要素について述べる。2.5.1 は梧棲鎮閩南語の単音節声調—単語調の記述である。閩南語では 2 音節以上の語や文節は必ず声調交替が行われる。2.5.2 は梧棲鎮閩南語の声調交替についての整理である。また文節中、声調交替以外で声調の対立が無くなる音節は軽声であり、このことについて 2.5.3 で記述及び分析する。梧棲鎮閩南語には少なくとも二種類の軽声がある。1 種類は固定軽声であり、低い/1/[21]の調値を保つ。もう 1 種類は弱化軽声で、前音節の声調の影響を受け、調値は/55/[55]、/33/[33]、/11/[21]のどれかになる。梧棲鎮閩南語の軽声は必ず文節末に現れる。2.5.4 では台湾閩南語における特殊声調について、梧棲鎮閩南語を中心に記述している。

2.6 はアクセントについての論述である。2.6.1 ではまず台湾閩南語のアクセント単位を確立する。「声調グループ」は韻律的単位として成立するものであり、文節とは必ずしも一致しない。閩南語では、声調交替によってまとめられる、いわゆる「声調グループ」(tone group)が存在するが、これは、声調交替の単語調や連語調と比べ、さらに大きな韻律単位である。このような単位は統語的な「文節」という単位とは少し異なる。本論文では、従来の「強」(アクセント核を持つ音節)と「中」(声調交替音節)と「軽」(軽声音節)に分ける区分のほかに、「次強」(形容詞三回繰り返しの第一音節、音訳借用語の第一音節)を挙げた。

2.7 は福建省泉州市安溪県馴嶺村閩南語の音韻体系の記述である。

本論文の第 2 章では次の成果があった。

1. 梧棲鎮閩南語及び馴嶺村閩南語に関する音韻体系の記述及び分析。特に末子音の部分は先行研究を踏まえて、声門閉鎖音が声調の弁別素性であることを示し、末子音を頭子音同様に/b/、/l/、/g/で分析した。
2. 閩南語の特殊声調によるアクセントの記述を考査し、アクセントの単位を明確にした。
3. 台湾閩南語における日本語からの音訳借用語は台湾閩南語の一部であり、閩南語のアクセントルールに従う。

4．　梧棲鎮閩南語はこの数百年で、祖籍地の駟嶺村閩南語とは異なった発展をみた。その違いには語彙的な差だけではなく、声調及び声調交替、特殊な形容詞３回繰り返し、接尾辞 a53 の語形成による同化、異化現象などが挙げられる。また、実現を表す a0 と lo0、進行形を表す te35 と tə53 など、幾つかの文法現象を代表する虚詞にも違いが現れた。

5．　台湾閩南語の先行研究及び本論文の分析結果によって、台湾各地における閩南語の地域差が少なくなっていることが分かる。

台湾閩南語と中国閩南語の違いには、最も分かりやすい部分では、植民地化の影響による日本語借用語の有無が挙げられる。これらは、とくに音訳借用語の部分は、中国閩南語話者のインフォーマントは殆ど理解できないことが、筆者のフィールドワークによっても確認できた。本論文の第３章は台湾閩南語における日本語からの音訳借用語について述べる。日本語の音韻体系と台湾閩南語音韻体系をあわせて検討して、台湾閩南語で借用する際の特徴を述べた。

3.1 では音訳借用語声調の問題点を提起し、研究の目的を確立する。

3.2 では先行研究のレビューと調査方法を述べる。

3.3 は梧棲鎮閩南語と標準日本語の音韻体系から見る台湾閩南語における音訳借用語の特徴である。子音音素の対応、母音音素の対応と音節の対応を整理し、借用によって梧棲鎮閩南語に新しい音節が発生したことを確認した。

3.4 では１音節から４音節語の借用語声調パターンを整理、分析し、音訳借用語の声調特徴を明らかにする。

3.5 では台湾閩南語における音訳借用語の意義を述べる。

3.6 では今後の課題について述べる。

第３章では次の成果があった。

1．台湾閩南語における日本語からの音訳借用語と、「台湾日本語」(日本植民地時代に使われた日本語)とを区別し、台湾閩南語における借用語の範囲を明確に確立した。台湾閩南語において、日本語からの借用語には音訳借用語、漢字借用語、および借用語からの派生語の３種類がある。

2．音訳借用語の声調には一定のルールがある。音訳借用語の声調ルールの整理をおこなった。

3．借用語で発生した新しい音節を確認することができた。

台湾閩南語における日本語からの音訳借用語の原型にたどり着くことができる俗文学の歌冊子について、その分析をする。

4.1 では台湾歌謡と「歌仔」についての先行研究のまとめと検討である。特

に先行研究では書名や論文題目だけが記されるのみで、内容が検討されていない日本植民地時代の研究を中心に述べた。4.1.1 では日本語と関係する「歌仔」の紹介である。4.1.2 では「日台会話新歌」に関する先行研究のまとめである。4.1.3 では「日台会話新歌」についての基本背景を記述する。4.1.4 では「日台会話新歌」が作られた経緯を述べる。

4.2 では「日台会話新歌」の体裁について述べる。4.2.1 では詩と「歌仔」の相違を述べ、4.2.2 では「日台会話新歌」の体裁の分析である。つまり、7 音節 1 句、4 句 1 連、基本的には 1 連の 4 句の最終音節は同じ韻を踏む。日本語と台湾閩南語と交互韻を踏むものもある。4.2.3 では七音節を調整するために、動詞の音節数を調節する方法を紹介する。4.2.4 では日本語と台湾閩南語を混淆する句で、どのように 7 音節を保つか、その音節の数え方を分析する。

4.3 では「日台会話新歌」各連の韻と平仄を整理した。

4.4 では閩南語話者による日本語記述の特徴を述べた。「日台会話新歌」については、これが日本語教育を普及するため、植民地政府によって作られたものだという説が先行研究で記されているが、「日台会話新歌」の日本語記述を観察すると、この説は間違いであることが分かる。

4.5 では「日台会話新歌」で挙げられた語彙の範疇を整理する。日常生活用語から商売、挨拶用語など多様である。

4.6 では「日台会話新歌」の価値と今後の課題について述べる。

4.7 は「日台会話新歌」の原文注釈である。

第 4 章では次の成果があった。

1.「日台会話新歌」は植民地政府によって作られたものではない。台湾人(台湾閩南語話者)によるものである。

2.「日台会話新歌」は、日本語をモーラではなく音節で記述している。このように音節で記述する方法は、現在の台湾閩南語における日本語からの音訳借用語と、共通点が多くある。

3.「日台会話新歌」は台湾閩南語における日本語からの音訳借用語の借用法について、貴重な資料とみなすことができる。